

編集後記

『人間科学研究』第6巻第1号をお届けします。今秋は、大学の母体である稲置学園が創立80周年の節目を迎えます。学園の基は昭和7年(1932)に誕生したので、人間ならば傘寿のお祝いに当たります。人間科学部は平成19年(2007)に産声を上げてから乳幼児期を終え、漸く小学校へ入学する段階です。言わばお爺さんと孫ほどの年齢差がありますが、学園の傘の下、学部は成長してきました。科学会も成人をめざし歩み続けたいと思います。

さて今号は、こども学科6件、スポーツ学科2件の研究成果が寄せられました。

岡部氏グループは、日常生活に普及したデジタルカメラを教育現場の画像教材に活かす有用性を実証しました。「百の言葉より一枚の写真」が直感や表現に優れる場合もあります。

清水氏は、小学校教員に必要な授業力、特に学級活動の指導力を養成するため担当講義へ学生を参加させる具体的な方法を試行しました。「教えることは学ぶこと」の実践例です。

高氏は、豊富なカウセンリング経験に基づく事例研究から高校中途退学の予防に関する提言をしました。「青春時代の真ん中は道に迷っているばかり」の生徒への大人の対応です。

谷中氏は、作曲家の視点から石彫家の作品を考察しました。一見ジャンルが異なる芸術のように感じますが、奏と彫の違いを超えた創作への情熱こそ「石に立つ矢」と言えます。

直江氏は、西洋音楽受容の黎明期に日本の声楽界に大きな功績を残し晩年は日本における「ベル・カントの父」と称されたサルコリの来日以前の活動をイタリアで調査しました。

村井氏は、珠洲市教育委員会指定による県内初の小中一貫校をモデルとして、9年間という連続した長いスパンで児童生徒を育てていく教育課程の在り方について展望しました。

井上氏は、知的障害者スポーツの指導、特に海外における陸上競技大会での体験を通じ「スポーツに国境はない」を体現、ハンディキャップを超える選手の活動を支援しました。

大森氏は、アスリート宮司ならではの観点から能登の祭に華を添える独自意匠を凝らしたキリコ(奉燈)について古代ギリシャの奉納祭典競技と類似する身体性を指摘しました。

どうぞ高覧ご批評くださいますよう、宜しく願い申し上げます。

2012年9月吉日

編集委員長 馬場 治

《投稿された論文等に関する著作権は基本的に人間科学会に帰属します》